

フランク・ナイトの経済学・競争体制批判

——シカゴ“学派”再考——

黒木 亮

I はじめに——“ナイト＝シカゴ学派の新古典派経済学者”という偶像——

シカゴ学派に限らず、ある群像をめぐる神話や伝説が創造されるのは大抵後代の事である。事実、経済学のシカゴ学派に注目が集まり始めたのは1960年代前半（Miller 1962; Coats 1963; 大野 1965; 猪木 1995）、F. ハイエクの『自由の条件』がシカゴで執筆・出版され（Hayek 1960; 西山 2008）、「コースの定理」が同じくシカゴで誕生した1960年前後からの話にすぎない（Coase [1988] 1990; 黒木 2002a）。またその創造過程も、当初は一種の仮想敵として、専ら部外者の想像の産物であったという側面が色濃く、シカゴ大に縁のある^{ゆかり}本人達の間には驚きや戸惑い、疑念や反発を呼び起こさずにはおかなかった（Bronfenbrenner 1962; Stigler 1962）。

もとより、この学派の生みの親とされるF. ナイト（Frank Knight: 1885-1972）が理論経済学者として活躍したのは主に大戦間期、1940年代前半までの話であり、その後は彼の研究志向自体、経済学から離れるように移動している。シカゴ大でのポジションまで、経済学教授（1927-45）から社会科学および哲学特別教授（1945-52）へと異動しているのである。そうしたなか一貫して変わらなかった事柄として、宗

教への強い関心以外で最も目を引くのは、彼がシカゴ大での講師時代（1917-19）¹⁾、『リスク・不確実性および利潤』（Knight [1921] 2006：以下『利潤』）の執筆中——博士論文「企業利潤の理論」の改訂作業時——に「編集上の指導」を仰いだ制度学派のJ. M. クラークから、「経済思想史」の講義を1927年に引き継ぎ、以来30年間、担当し続けた事実くらいであろうか（*ibid.*, xi; Howey 1983, 170）。

にもかかわらず、ナイトには今や“シカゴ学派の新古典派経済学者”というイメージが強くまとわりついている。一学派に属する学説史家など語義矛盾に等しいにもかかわらず、専門家ですえ、またそうであるがゆえに、そうした一面的偶像把握にとらわれすぎているように見えるのである²⁾。まして一般には“シカゴ学派総帥”，あるいはせいぜい『利潤』や「競争の倫理」（1923）の著者としてしか知られていない、と言ってもよいだろう³⁾。

そしてその背景、なかでも「シカゴ学派の祖」というナイト像が広く今日の日本にまで知れ渡っているのは、ひとえに「シカゴのミスター・マクロ[経済学]」M. フリードマンと「ミスター・ミクロ」G. スティグラーによるところが大きい（Becker 1991, 140: [補足] は引用者、以下同様）。すなわち1930年代前半に院生としてナイ

トに師事し、恩師の 50 歳を祝う論文集『競争の倫理』(1935)を企画した彼らが、シカゴ大へ帰還後、マネタリストや規制緩和論者として金融・産業組織論に一石を投じる“学派”を醸成していく中で、彼ら共通の師としてナイトの名を推し挙げていた事が (Friedman 1998; Stigler [1988] 2003), 強く影響しているように思われるのである。というのも、今日「シカゴ学派の政策上の立場」として「広く認識されているもの」や「政策上の諸見解は、明らかに、1946 年シカゴ大学に復帰したミルトン・フリードマンが主として確立したもの」であって (Stigler [1988] 2003, 150 / 訳 176), 「端的に」『フリードマン学派』に他ならない」とも言えるからであり (根井 2009, 146), 他方でナイト自身は生前、裁量的な金融政策の必要性を唱え (Knight [1941] 1999; 1960), 実証研究とは距離を置いていたばかりか (Reder 1982; Knight 1999; Emmett 2009), 累進課税や相続税制度の維持・継続を支持するなど、元来の自由主義者としての側面も強く保持し続けていたからである (Knight [1932] 1991, [1946] 1982; 宇沢 2000)。

それどころかナイトは、ネオ・リベラリズムの萌芽に逸早く警鐘を鳴らし、その主導者や追従者となりうる人々に釘をさしておくことも忘れていなかったとさえ言いうる。というのも、彼が最晩年、まさにフリードマンやハイエクらの主張が衆目を集め始めた 1960 年代中盤に、「自由放任主義——その賛否——」と題する講演をシカゴ大学で行い、次のような苦言を呈していたからである。

人間の間違ひの大部分は、そもそもの前提に含まれているのであって、間違った論理の中にあるわけではない。つまり人々は、半面の真理を真理そのものとして論じる事さえできれば、それらしい前提からほとんど全てを証明する事ができるのであって、しかもこれが

以下で示すように、政治的な議論ではごく普通に行われている事なのである。学生達は、そのような議論を練り上げ、展開していく技能は習得しているように見える (おなじみの図式は、産湯と一緒に赤子まで捨てるというもののだが)。その主要な欠点は絶対主義的解釈、つまり言説というものは正しいか間違っているかのいずれかであるはずで、しかも間違っている場合には正反対の言説が正しいはずだ、と考える事なのである。(Knight [1967] 1999, 436-37 / 訳 226)

ナイトはここで、いわゆる理論の正否ではなく、むしろ論理的に正しい議論の前段、すなわち前提の置き方やその是非、そして後段における論法の正否や正論に基づく論争の成否に注目している。いわば事の善悪や白黒を単純に分けてしまう二分法や、「自身に理があるのだから必然的に相手に非があるに違いない」あるいは「相手に非があるのなら必然的に自身に理があるはずだ」といった二次元的思考法などに注意を喚起し、そのようなレトリックに対して「絶対主義的解釈」という呼称まで与えて警鐘を鳴らしているのである。

さらに重要なのは、ナイトがそうした論法の典型としてマルクス主義と自由放任主義の 2 つを挙げ、講演では主に後者——特にハイエクの『自由の条件』——を批判していた点である。すなわち「マルクス主義経済学は不条理の塊であるが、後に示すように、自由放任主義を支持する人々も、残念なことに劣らず数多くの戯言を公刊している」とまで断じていたのである (ibid., 437 / 訳 227: 強調はナイト、原典ではイタリック、以下同様)。

にもかかわらずナイトは、幸か不幸か、死後「シカゴ学派の経済学者」として復活し、その「始祖」にまで祀り上げられてしまうことになる。P. サミュエルソンのようなりベラル派の教え子まで、ナイトの死後まだ間も無い頃、当時定期

的に寄稿していた『ニューズウィーク』（1972年7月31日付）のなかで次のように明言していたからである。

アメリカにおける最も影響力の大きい知識人の一人が亡くなった。しかし、その人の名を知る人はほとんどない。……ナイトは経済学におけるシカゴ学派の創始者であった。すなわち、ナイトをアブラハムとすれば、ヘンリー・サイモン〔ズ〕がアイザック〔=イサク〕であり、ミルトン・フリードマンはヤコブということになる。/私の知るかぎりでは、ナイトは一度もホワイトハウスに招請されたことはなかったけれど、彼のワシントンにおける影響力は、財務長官のジョージ・シュルツが外国為替相場について行なうであろう決定の中に、そしてまた、大統領経済諮問委員会委員長のハーバート・スタインの毒舌的機知の中に見出すことができる。しかし、これも氷山の目に見える一角だけでしかない。私は、あえて言うが、革新派経済学者の中にさえ、フランク・ナイトの思想の流れを汲むものがある。（Samuelson [1973] 1983, 160 / 訳206）

ラディカル・エコノミストのなかにさえ影響の痕が窺えるほど「最も影響力の大きい知識人の一人」であったにもかかわらず、ナイトは、弟子たちの敬慕や善意に基づく様々な言動や伝聞、社会情勢や思想潮流の変化、そして何より彼自身の死によって、「シカゴ学派の創始者」として、いわば釘付けにされてしまったのである⁴⁾。

このようなナイト像を一旦破壊し、より正確なシカゴ学派理解のための足場を掘り広げること、これが本稿の目的である。こうした課題設定自体は勿論、やや恣意的で、極めて局所的である。というのも、思想史的に俯瞰するならば、その舞台は、ナイトやJ. ヴァイナーら古典的

リベラル、フリードマンやハイエクらネオ・リベラル、J.M. クラークやP. ダグラスらニュー・リベラルないし今日の意味でのリベラル、T. ヴェブレンやO. ランゲら社会主義者がかつて在籍していたとはいえ、あくまでもシカゴ大学という一研究機関周辺に限られているからであり、なかでも彼ら全員との思想的接点をもつナイトを挟んで自由闊達に繰り広げられていたであろうアカデミックな議論にのみ、考察対象が絞り込まれているからである。その意味で本稿の議論は、いわばナイトの言動や視線の先にだけ焦点を合わせ、論点ごとに——執筆年代に拘ることなく——スポットライトを当てて、その射程が切り結ぶ範囲で、彼の一贯した思索の軸と後の多彩なシカゴ学派の“起源”を浮かび上がらせる、というかなり強引な作業に他ならない⁵⁾。

だが、この濃縮的な試みによってはじめて、これまでシカゴ学派という溶媒によって希釈・攪拌されがちであったナイト固有の経済・政治・倫理思想が、重層的に沈殿・凝結していくはずである。またその結果——さらにシリーズ全体を通して——シカゴ学派の経済学者それぞれの思想や方法論が逆照射され、相違点や異質性が色濃く照らし出されるであろう。そればかりか、古典的自由主義からネオ・リベラリズムに通底する経済学共通の土壌はもちろん、その地下を流れ伝い、今日市井の人々にまで広く浸透した“経済思想”に潜む様々な矛盾までもが、より純度の高い形で抽出されるはずである。たとえば、今や真・善・美同様、あるいはそれ以上に重要な判断規準となってしまったかに映る競争の論理や倫理、すなわち「勝つか負けるか、^{ランク}順位は上か下か、面子や体裁は保てるか」といった判断規準に潜む功罪の断面が、鮮鋭に映し出されるだろう。そうしてさらに、本稿全体の副産物として、新古典派や制度学派といった括り方それ自体——いわば今日の経済思想史研究の大前提——が抱え込む問題点までもが、明瞭に

浮かび上がってくるにちがいない⁶⁾。

II ナイトの「自由企業・競争体制および経済学」批判

ナイト固有の自由主義思想とその学史的立場、後のシカゴ学派との連続性や異質性を併せ持つ思索の一貫性やその歴史的意義は一体どこにあるか。結論からいえば、それはナイトが、ビジネス・パーソンや株式会社、労働組合や公益法人といった経済的競技者が社会の主役に踊り出た 20 世紀、より正確には今日のライフ・スタイルや経済制度、政策思想や現代経済学の原型が世界に先駆けて出揃い始めた第一次大戦後のアメリカで、他のどの経済学者よりも多面的かつ重層的に競争を解析し、その美醜や善悪、好悪や良し悪しまでバランスよく考察しえた点に求めうる。社会に不可逆的に浸透していく強力な競争作用を世界史的観点から精確に見据えた上で、その目に余る破壊力と見えざる創造力をいかに民主的に統御すべきか、そもそも我々人間に知的に飼いならしめるのか、といった難題に取り組み、その経済的・政治的・倫理的解決策を模索し続けたのだ、と云うるのである。

経済領域に限らず、様々な分野での自由な冒険的企てを許容する社会より他に、不合理なわれわれ人間に(構想でなく)実現を望みうる最高の——いわば「最悪さが最小の」(Knight [1951] 1999, 366) ——社会はないらしい、といった一種の諦観を背後に宿し、秩序の崩壊や先祖返りの阻止、体制の陶冶や鍛錬を期して展開された徹底的な「自由企業体制」批判こそ、信仰心の篤い保守的な家庭に育ったナイト自らがよりよい社会の実現へ向け、生涯にわたって挑み続けた学問的エンタープライズだったのだ、と言い換えてもよい。だが、その知的探求の成果が芳しくなかったという現実も、ここで予め指摘しておかなければならない。なぜなら、ナイト自身が晩年、ヴァージニア大学での連続講義——『知性と民主的行動』(1960)——の

中で、経済学の限界に触れながら次のように告白していたからである。

私はこれまで最悪の限界については言及してこなかった。なかでもより深刻な限界が生じるのは、多かれ少なかれ、経済学と複数の社会関係からなる他の側面、社会心理学やその他の領域間の境界線上である。そのなかでも軽視されているのが、経済生活それ自体が抱えているゲームの側面であり、競争のスポーツの側面であって、これに他の遊びの形態やギャンブルの魅力が加わる。私見ないし憶測では、こうした勝負や賭けの側面は広く、重大であって、人々の経済的欲求を満たしていくなかでそれが果たしている役割という観点から見ても、価値観や社会政策の観点から見ても、それは同じである。私は長年にわたり、心の中で何度も何度もこの問題と向き合ってきたため、経済理論によって描出されるような満足の最大化という考え方全体、すなわち消費者の支出と生産的資源の用途をめぐる合理的かつ適正な配分に基づいて、代数からなる関数のような所与の欲求を最大限に満たす、という考え方を、あまり真剣には受け取れなくなってしまったと言わなければならない。(Knight 1960, 107-08)

自らも建設に寄与した経済分析の基礎を当のナイトが真面目に受け取れなくなってしまった理論的限界とは具体的にどのようなものだったのか。また逆に、無駄や不条理に満ちた遊興や勝負の世界を人間生活の基礎の一部としてより真剣に受け止めるようになった哲学的背景とは一体どんなものだったのか。以下この疑問の解消に照準を合わせつつ、自由放任主義や共産主義だけでなく、自身の拠って立つ自由主義やキリスト教の限界まで等しく明示し続けたナイトの真面目、すなわち「複眼的」(根井 2008, 35)で「堅牢」(竹森 2008, 19)な彼の体制批判や

理念（型）批判の一端——正確には5つの先端——を尖鋭に削り出してみたい。

1. 競争の不経済性——「完全競争・不確実性および利潤」再考——

ナイトは『利潤』で、「日常生活の中で適当に使われている言葉が専門用語の使い方に深刻な混乱をもたらしてきた」と語り（Knight [1921] 2006, 22-23）、利潤や競争が論じられる場合に特にその傾向が顕著だと指摘していた。さらに最晩年に至ってもなお、「個人主義的分析のなかで切り捨てられている主要な事実は、間違いなく『競争』なのだ」とか、競争や勝ち負けは「市場の関係について（過去多くの偉大な著述家によって）力説されてきた理にかなった交換とは正反対のものだ」などと語り（Knight [1967] 1999, 449-50 / 訳 249）、競争をめぐる世の誤解や無理解を戒める彼の“説教”が止むことはなかった。

だが、経済学的分析のなかで「競争」が「切り捨てられている」とは一体どういうことだろう。またスミスら過去の偉大な思想家が力説してきた「理にかなった交換」と「競争」とが実は「正反対」であり、「一般理論のなかに対抗心が占める場所はない」（*ibid.*）とまでナイトが断言していたのはなぜか。

『利潤』以降もナイトが繰り返し指摘した通り、経済学の一般理論における競争状態、すなわち理念的な「完全競争」状態とは、参加者全員が価格受容者であって、誰も価格や他人への恣意的な影響力をもたない、という大前提をさす。その意味において平等かつ自由に各人が経済活動を営みうる理想状態こそ完全競争状態なのである。ナイトは整理する。

理想的な市場は（参加資格は伴うが）全く自由である。というのも完全競争の下では、参加者すべてが等しく無数の機会に恵まれており、したがって誰も他人に対する恣意的な力

などもっていないからである。そこでは自由交換による相互利益という原則を受け容れること以外、意見が一致する必要は全くない。各人は他人に干渉されることなく自身の欲望に従うことができるのであり、ただ全ての取引において他の参加者との自由な合意を考慮するだけでよい。この状況が通例『自由競争』として描写されるものであるが、そこには動機としての対抗心が占めるもっともらしい場所は存在しない。それは協力関係の正反対であるし、およそ“勝利”が敗北によって相殺されるということは明らかだからである。他人を妨害しようという思いだけでなく、他人のために役立ちたいという意志が個人の動機から排除されているにもかかわらず、完全競争の行き着く先は理想的な協力関係なのである。（Knight 1960, 29）

足の引っ張り合いや席の譲り合いなどなく、単に市井で提示される価格や自由契約の原則に従っているだけで他人との理想的な協力関係が成立する状態、これこそが完全競争のもたらす均衡状態であり、“自由競争”論者が想定する理想状態だ、というわけである⁷⁾。

あるいは完全競争市場とは、“もし仮に我々が見栄や流行といった不合理な事情に左右されることなく、自身の選好や価格情報だけを判断基準に据え、予算制約や技術制約に従って消費・生産活動に勤しむならば、意外にも一種の理想的な協力関係が生まれ、資源が効率的に配分されて、個人所得・国民所得が最大化される”という理論的事実を明示するための仮想空間にすぎないとも言える。それはいわば「経済的理想状態」の成立条件を明示するために理念的に組み上げられた「競争の真空地帯」なのである。再びナイトの表現を借りれば、それは他人と「張り合うこともなければ、値切ることもなく」、「まるで他人がスロットマシンでもあるかのように対応」し、「心理的に協調することがない」

にも関わらず、一種の協力関係が成立する仮想現実の世界だといえるだろう (Knight [1939] 1982, 80).

実際そのような世界では、純粋に実用性だけが追求され、資源も節約的に活用されて、最も効率的な経済が出現するはずである。そもそも敵対関係^{ライバル}を大前提とする「競争の論理」は、「経済の論理」とは本来異質のものであるし、極端な場合にはマイナスの影響しかもたらさないだろう。どのような勝負事であれ、勝者の背後には無数の敗者が^{たお}斃れているはずであり、決着がつくまでの暗中模索過程では、膨大な資源や人力、無形の文化遺産や道徳慣習までもが消尽されている可能性も少なくないからである。さらに、販売競争やパテント競争で勝ち残った企業の製品こそが最もコストパフォーマンスに優れたものであるとは必ずしも言い切れないという現実も、今日ではよく知られている通りである。

そしてここで重要なのは、この本来的に不合理な競争の現実と、完全に合理的な完全競争という理念型との間にある見えざるギャップを象徴する概念こそがナイトの「不確実性」であり、その裏面としての「完全知識」の前提なのであって、現実の中でそうした隙間に自ら身を投じ、新たな生産活動を促進する触媒こそが「企業家」であり、彼らの「利潤」獲得「競争」がいわばその生産・生成反応過程に他ならない、という点である。ナイトはいう。

その〔競争〕過程の本質は、企業家や将来の企業家が、将来における生産的サービスの利用をめぐる競争合っているということにある。生産的サービスへの報酬は、現在そのサービスの価値をめぐる市場で広くなされている競争的な推定によって決定される。他方で、不確実であるという事実、すなわち人間の予想は全てはずれる傾向にあるという事実を考慮すると、生産的サービスの利用によって最終的に入手される収益は、この推定値から

乖離することになる。(Knight [1921] 2006, 309)

各種の価格をめぐるこうした先の読み合いや予想の失敗と表裏一体の——その意味でも本来的に計算不能な——不確実性こそ、ナイトが新たに定義し、用語法の限定を提唱した「不確実性」である。この不確実性に付随する「推定値からの乖離」額として彼が新たに再定義した不確定所得が「利潤」であって、プラス・マイナスどちらに転ぶか分らないこの差額を求めて市場で激しい競争を繰り返す主体が「企業家」なのである⁸⁾。

と同時に、「自分は勇敢で卓越していると信じる」「大の自信家」や「エネルギー的な」「楽道家」とも形容しうる企業家は、競争の渦中で「ライバルよりも高値をつけなければというプレッシャー」にも「絶えず」晒され続けるため、「妥当だと思ふ以上の値を付けてしまう」、すなわち不合理な行動に出る傾向が強い、ともナイトは指摘する (ibid., 366)。もとより我々の「多くは不合理なもので、自らが幸運に恵まれていると固く信じ込んでいる」が、「こうした事例が顕著に見られる代表的な階層」こそ「ビジネスマン」だ、というのである。さらにナイトは、「既に確立された事業の所有者」には「豊かな市民の心理として顕著な」「物事に執着する気質」が強いため、新しいベンチャーなどに「一度身を投じてしまえば、一般的に行き着く所まで行ってしまう」傾向がある、とも指摘していた (ibid.)。だからこそ彼は、企業家層全体を平均すると「利潤はマイナスであろう」と語り、「ビジネスは全体として損失を被っているという見解を強く持っている」と明言したのである (ibid., 364-65)。

およそ以上が、ナイトの競争観の骨子である。そしてそれはまた、彼が「競争の倫理」において「自由と自由競争の混同ほど見苦しい誤謬は存在しないが、この間違いは頻繁に繰り返され

ている。初歩的な理論自体が示すように、どのような経済集団でも、その構成員は競争よりも協力によって、必ずより多くのものを作り出すことができる」と述べた根拠であり (Knight [1923] 1999, 70 / 訳 17), 長論文「倫理と経済改革」(1939)において「高度に組織化された市場の外部では、システム全体がライバル心や猜疑心といった『感情』と詐欺やペテンを上品に呼び変えた『戦略』とで満ち溢れている」と批判し、「企業経済を批判する人々がほとんど見過してきた要素」として「消費者自身の不合理性と貪欲」を指摘した論拠でもある (Knight [1939] 1982, 81)。このことをナイトは、『知性と民主的行動』(1960)でも再説している。

競争とは第一義的には対抗関係の事であり、^{ライバルリー}経済的動機とは正反対の事を意味する。したがって我々が競争システムについて語る際には何か全く違う物を思い浮かべなければならない。協調システムこそがそれである。もし我々に言葉をめぐる愚かな争いを止めるつもりがあるなら、このことを一般の人々に理解させるようにしなければならない。(Knight 1960, 87)

2. 存在命題の当為性——「自由交換・選好および功利主義」再考——

確認したように、自由企業体制において「資源を生産活動に利用するための指針になる価値基準は商品の価格である」(Knight [1923] 1999, 74 / 訳 24)。すなわち、「生産物であれ、貢献度であれ、その評価はつねに価格を基準に行われている」が、その一方で、たとえば「倫理的な見地から年代もののワイン一瓶の価値が小麦粉1バレルのそれに等しいとか、権力者のご婦人が装う素晴らしい夜会服の価値が堅固な住居のそれと等しい、などと強弁する者がいない」ように、「価格と倫理的価値や人間的な重要さとの間には密接なつながりは存在しない」(ibid.,

73 / 訳 21-22)。さらに、「枷の外れた個人主義が、道徳的規範の向上よりも、むしろその漸次的低下をもたらす傾向」や、「『人々が欲しがるものを与える』ということは大衆の眼識の墮落を意味することが多い」現実に照らせば、「この乖離」は「現行の秩序がより競争的なものへと純化され、社会的な統制の及ぶ範囲が縮小されて行けば」「桁外れに拡大していくように思われる」(ibid., 74 / 訳 24)。

このような危惧を抱いていたナイトは、この乖離問題の根源を半ば隠蔽し、その所在を直視し難くしている原因もまた、価格理論の大前提のなかにあると指摘する。「個人による自由な交換」という大原則の中に、既に暗黙のうちに(1) 現行の分配秩序の自明視と(2) 富の無限の獲得や蓄積の正当化、といった倫理的判断が紛れ込んでいるというのである。

その〔自由交換の〕原則は、ただ単に、欲望充足の手段をめぐる現行の分配が変わることなく永遠に続いてゆくのを定めることによって倫理問題を処理しているにすぎず、まるで出発点しだいでも結果も決まってしまう1つのプロセスによって、判定が下されているかのようなものである。それは先決問題要求の虚偽を二重に犯すことによって現状を神聖視しているのだ。結果が1つの倫理的判断に依拠しており、しかも倫理的に弁護しえない判断に依拠しているのである。その倫理とは、第一に、所持物を保有し続けることは正当だというものである。だがそれに留まらない。…その倫理はまた、所持物をさらに増やすためにそれを利用することは正当だと公言する。際限なく増やすために！(Knight [1929] 1982, 8)

厳密には四重の問題が指摘されている。まず、交換に先立つ人々の所得水準や保有財産などに関して、(1-1)「現行の分配が変わらない、もしくは(当面)一定」との理論的前提が置かれ、

その結果 (1-2)「現行の所得配分の黙認」という倫理的判断が付随している。と同時に、世の道徳に照らして正当化されうるとは言い難い (2-1)「際限のない獲得欲の肯定」と (2-2)「所有欲の肯定」という倫理的判断までもが潜んでいる、という指摘である。

そればかりか、ナイトはここに、社会科学に潜在する 1 つの方法的弱点までかぎつける。すなわち「社会科学において西洋思想がもっている弱点の 1 つ、あるいは最も人気のある哲学の流派がもつ悪癖は、価値判断を選好の表明へと『還元』してしまう点にある」と指摘し (Knight [1939] 1982, 60)、「経済学的思考に依拠した説明」は「たとえ明白ではなくとも暗黙におかれ、議論を可能にし、意味あるものにしてしている前提」を「正当な理由もなく素通りするという共通の特徴をもっている」と批判するのである (ibid., 113)。「そうした説明はすべて、何らかの実証主義的な前提をおくか、あるいは何らかの形で利己的な意志を知性より上位に置いて」、既に指摘してきたような重要な倫理的難題をスルーしてしまう傾向をもっている、と言い換えてもよいだろう (ibid.)。

だが、いうまでもなく、経済政策などの現実問題をめぐって倫理的な課題に一切触れることなく、『「事実はこちらである』とか、『こうしたい、ああしてほしい』といった表現で始まる提言だけをを使って、集団の方針をめぐる議論を展開することなどできるはずがない」(ibid.)。事実たとえば、「生産物の貨幣価値は『需要』に関わる問題だが、需要とは、商品を買求める大衆の嗜好や購買力、代替品の利用可能性を反映したもの」にすぎず、では大衆の購買力や嗜好はどこから生来するのか、とさらに追求すれば、それは現代では「主に経済体制それ自体の作用によって作り出され、規定されている」と言うほかはない (Knight [1923] 1999, 73 / 訳 21)。そのうえ「野放図な競争が詐欺や不正行為を誘発する」傾向や、「家族」制度を通じて「富や教養」

「経済的な地位」や「教育上有利な立場が継承されて不平等が次第に拡大していく傾向」がみられる現状では、「結果的に、社会階層の両端に属する人々の人格に悪影響を及ぼしやすく」、「多くの場合、競争的経済秩序が人々の人格を練り上げていく際に辿りがちな方向は、倫理的理想から乖離するということを認めざるを得ない」(ibid., 68-69 / 訳 14)。このような現実があるなかで、「価格は需要によって決まり、需要は価格によって決まる」といった“科学的”立論やそうした「評価プロセス全体」に留まり続けようとするならば、そうした見地や循環論(法)それ自体が確かに、「倫理的見地からみれば、文字通りの『悪』循環」と言わざるをえないだろう (ibid., 73 / 訳 21-22)。

だからナイトは、自由交換の拡大や「自由の最大化を 1 つの“基準”として訴えることは詭弁を含んでいる」とも明言する (Knight [1929] 1982, 19)。そうした立論や「その帰結は、権能に関わる現行の配分を教条的に受け容れるというもの」に最初からならざるをえないため、「1 つの倫理的提言」ないし「偽装された価値判断」として「弁護できない」とまで断言したのである (ibid.)。そればかりか彼は、経済学的思考に潜在する以上の問題の根源、すなわちその哲学的基礎に位置する功利主義の欠陥をも、次のように抉り出していく。

自由の最大化を社会政策の目標とする功利主義の致命的な欠陥は、自由と能力を混同していることである。その教説を擁護する人々は、行動に必要な手段を保有していないかぎり、行動の自由など無意味だという事実や、現実の問題は形式的な自由の問題というよりも、能力の問題だという事実を見落としているのである。(ibid., 7)

3. 自然権の虚無性——「自由・平等および経済的正義」再考——

ナイトの批判眼はさらにアメリカ建国の理念にも向けられる。しかもそれが無意味だということだから穏やかでない。トマス・ジェファスン・センターでの発言である。

ジェファスンが、人は生まれながらにして平等であり、自由という自然権を付与されているという趣旨のことを述べたとき、彼は何を考えていたのか。私には1つの謎である。我々は自由に生まれてくるのではなく、無力なまま生まれてくる。つまり、あの理念はまったく意味をなさないのだ。生まれながらの平等というのは、ただ全員が等しく無能力であるということの意味しているにすぎない。同じことは、自由についてもいえる。(Knight 1960, 117)

「自由の中味は」、ナイトの言うとおおり、我々が「活動する能力を持っているかどうかによって左右される」。さらにそれが「交換関係のなかで効果的な自由であるためには、取引相手の側が保有する能力に比べて見劣りしない能力」でなければならない (Knight [1941] 1982, 239 / 訳 136-37)。

そのうえ、「私的な家族を基盤とする経済秩序では、個人が過去に果たした経済的役割だけで私有財産が決まるということではなく、それはもっぱら相続や遺伝といった偶然の出来事や野性的な現実によって決まる」(Knight [1929] 1982, 13)。くわえて、「不確実性」という「形式的な原理へ還元することがより一層困難」な問題や、「生産能力の維持や増大が幸運の問題であるという部分は決して少なくない」という現実もあるため、「相続された富から（あるいは訓練や社会的地位などから）所得をえることに対して“等しく自由であること”を根拠に、あるいは個人的な報奨のようなものを根拠に、

どれだけ倫理的な意味づけを与えられるかということを見極めるのは容易ではない」(ibid.)ともナイトは指摘していた。

だが、ナイトはなぜ、「等しく自由であること」、すなわち「機会の平等」が保障されているだけでは倫理的に不十分だと断言したのだろうか。その踏み込んだ理由、平等の理念の盲点ともいべき問題の根源を、彼は次のように掘り起こしている。

現実の人間の公平とは、明らかに、平等の「存在である」という1つの権利だけでなく、等しく「諸権利をもつ」ということも同様に含んでいると思われる。自由とは、もう一度いえば、人々がなしうることを実行に移す権利、すなわち力を発揮する権利を意味しており、それが内実を伴うのは、ただ、人々が能力をもっている場合に限られる。平等ではない能力を平等に使う権利など平等ではない。正反対なのである。(Knight [1939] 1982, 87)

要するに、平等の理念や機会の平等それ自体の中に不平等の芽が潜んでいる、というのだ。

確かに、たとえば現代の「ビジネス・ゲーム」では、プレーヤー間の力量の違いが極めて大きい。そのため、そうした「大混戦の中で、弱者も強者との競争を余儀なくされている。互いに力量の異なる者が競い合う際に不可欠だと自覚されるスポーツマンシップのようなものは、そこには存在」せず、「参加者の階級分けやハンディの割り当てといったようなもの」も「存在していない」(Knight [1923] 1999, 80-81 / 訳 34)。そればかりか「実際の状況はさらに酷く、ハンディがあるといえれば」、「弱者よりも強者のために割り振られて」おり、「親から個人的に譲り受けたこの有利な立場に加えて、教育を受ける利点やゲームに参加するための優先的な条件、さらには賞金を前払するという利益さえ追加」されている始末である (ibid.)。

だからナイトは、「等しく自由であるという原則が、もしも自由交換を基盤とする社会秩序を通じて表現されるようなものであるとするならば、それは経済的正義の問題の解決には全く役に立たない」とも明言する。「歴史的に見れば、その教義の意義は不平等を正当化することであり、その企ては失敗に終わっている」とまで断言したのである (Knight [1929] 1982, 13-14)。ナイトがこの問題を重大視したのは、勿論、不平等の拡大が人々の対等な経済活動、すなわち自由交換の成立を阻害し、「交換的正義」の実現や「自由」という大原則まで破壊しかねない、と診ていたからに他ならない。彼は警鐘を鳴らしている。

経済的正義の問題が非常に深刻なものとなる理由は、特に個人主義的な経済活動が不平等を増幅させる方向へと向かい、経済的な手段を使ってより経済的な手段を得ようとする傾向があるからである。すなわち、いついかなるときであれ、多くを所有するものは、さらに多くのものを得るために有利な立場にあるのだ。現実的な条件下では、この点に関わる多くの不平等が交換的正義の土台を掘り崩す。産出への貢献度をめぐる市場価値の対等性を侵食するのである。こうして極端な不平等は自由を無効なものにしてしまう。(Knight 1960, 119)

4. ゲームの自壊性——「経済人・銀行規制 および選挙」再考——

そもそも「交換的正義や^エ平衡法上^ラの利権^イ、つまり『個人』が持ち込んだものと持ち去っていくものとの間にある量的な等価性^テでさえ、自立して所得を受け取る人にしか意味をなさない」という問題も、社会には常に、潜在的に遍在している (Knight [1939] 1982, 87-88)。なぜなら「実質的な消費活動は家庭という社会的な単位で営まれており、したがって家長以外の家族、

少なくともすべての『被扶養家族』にとっては、形式的にはどうであれ、報酬と貢献との間の関係はほとんどないか、全く無関係」だからである (ibid.)。さらに「妻の立場など全く特異なもので、その経済的ステータスがもっぱら夫選びの賢明さへの『報酬』となっており、「子供への不当な処遇については天の助けを大いに必要とする」(ibid.)。そしてだからこそ、「アダム・スミスや他のリベラルが、政府の担う正当な機能や仕事として、青少年への教育の整備、様々な程度に応じた知識の普及、科学、芸術、文化的活動全般の振興を認め」(ibid., 61-62)、近現代の「自由主義社会」が、^{リベラル・ソサイエティーズ}「とくに若者に対する教育その他の必要物を提供するために」、またそうして「階級の両端で不平等を減ら」し、「誰もが面目を保ちうる最低限を提供するために」、^{リベラル・ソサイエティーズ}「累進課税や相続税のような手段で対処しようと試みてきた」のだと言うこともできるだろう (Knight [1946] 1982, 457 / 訳 194-95)。

だが実は、成年男性、とりわけ理想の「経済人」に最も近いとされる「人生の盛りにあって扶養家族を抱えていない男子」でさえ、理想的な交換主体であるとは言い難い、という大問題もある (Knight [1923] 1999, 68 / 訳 14)。むしろ後者の方が、不合理な賭けに出易いとすら言うてよいのではあるまいか。もとより「リスクやチャンスに対する人々の態度は一般に不合理なもの」であるから、ナイト自身は「賭博の禁止」だけでなく、「多くの規制が個人的自由に対して求められる」と説いていた (ibid., 71-72 / 訳 19)。そればかりか、彼は、「責任を負う資格と能力を相応にもつ人々の手に資源の管理や生産活動の監督を委ねるための規定」を設けることは勿論、「このような個人が賭けを行う自由もまた、一般的な規則に基づいてさらに厳しく制限されなければならない」とまで主張していたのである (ibid.)。

だがなぜ、経済的手腕をもつ「個人が賭けを行う自由」の方が「さらに厳しく制限されなけ

ればならない」のだろうか。最も分かりやすい例は、他人のお金を預かる銀行のケースだろう。というのも、「信用の利用が高度に発達し」、「銀行業や通貨の管理がビジネス全体の管理と深く結びついている」現代社会で「自由銀行制度」のようなものが導入されてしまったら、「早晩あらゆる交換関係は混乱状態に陥ってしまう」からである (ibid., 71 / 訳 18)。この指摘から約 10 年後、米国金融が実際に大混乱に陥っていた 1933 年 3 月 16 日、ナイトはさらに、シカゴ大の他の経済学者と連名で以下 6 項目にまとめるような「シカゴ・プラン」を起草し、ローズヴェルト政権に提出している。

すなわち (1) 連邦政府は速やかに連邦準備銀行を管理下におき、その下で (2) 連銀は全加盟銀行の預金を保証し、非加盟銀行の救済にもあたる。(3) 加盟預金者への支払いに必要な額の連邦準備券を発行し、これを法貨とする。(4) 商業銀行が担っている預金と貸付の機能を分離すべく、新たな金融法人の創設を許可し、それぞれ別々に預金・決済業務と投資・貸付業務に専従させる。(5) 財政・金融政策を通じて卸売物価を 15% 引き上げ、これを超える上昇は阻止する。(6) 金の自由な鑄造や輸出入を禁じ、先の法貨と交換で金貨を徴収するなど、通貨としての金の取引も事実上政府・連銀の管理下におく、という提案である⁹⁾。実際に「ニューディールの政策構想に影響を及ぼした」この「シカゴ・プラン」は、いわば金融不安定性の原因を商業銀行の信用創造——部分準備——に求め、その回避手段として「100% 預金準備制度を導入」することによって「国家による全通貨の独占的・計画的な供給システムを構築」しつつ、他方で「投資に対する政府介入」は「回避」する、という「極めてラディカルな金融制度改革プラン」であった (須藤 2006, 145, 165)。

だが、もちろん、こうした管理・監督を徹底しさえすれば問題が解決する、とナイトが考えていたわけではない。なぜならそうした措置は、

経済的責任を負う資格と能力をもつとは言い難い「あまりに保守的に過ぎる」人々に、資源の管理や経済活動の監督を委ねることに等しいからである (Knight [1923] 1999, 72 / 訳 20)。通貨管理の現実だけに論点を絞ってみても、そこには「貨幣の実態やその変化に関する信頼性の高い指標を見つけ出すこと」や「貨幣をめぐる情勢に適切かつ効果的に影響する方策を考案・工夫すること」、そして「社会のために行使されるべき権限を人間によって組織される政府機関に安全に委任すること」等々の難題が山積している (Knight [1941] 1999, 146 / 訳 106)。

そのうえナイトには、まるで「悪貨が良貨を駆逐する」かのような詐欺的な選挙運動が横行し、「単なる嘘つきコンテストや幻惑競争、道化合戦」と化してしまった民主政治の現実に対するより強い失望と不信があった (Knight [1932] 1991, 58, 64)。「民主的な政治過程それ自体、本来的に競争的であり、政治的な競争をビジネスの競争の代わりにしようものなら、ビジネスの競争下でもっぱら不満の対象となっていた多くの害悪がさらに増幅されるだろう」と危惧していたのである (Knight 1936, 265 / 訳 71)。しかも大恐慌の頃には、「元リベラルの観点からみた共産主義擁護論」(Knight [1932] 1991) と題する講話を内輪で行い、「強い共産主義の得票力と強力な共産主義運動の成長は、その最も確実な帰結の 1 つとして、この国における真の——すなわち誇り高き——保守政党の発展をもたらすであろうから」、「変化を求め、知的な投票行動を望む者は」「共産主義者に投票すべきである」と提案してみたり (ibid., 57-58)¹⁰⁾。以下のような問いを公然と投げかけてしまうほど、深刻な政治不信の闇・「厭世主義」の淵に沈んでいたのである (Samuels 1991, 50)。

なぜ我々は政治的な力を経済的な力と同じように自由に使ってはならないのだろうか？
単に自由という概念だけに関心をよせるかぎ

り、民主主義国の多数派もしくはあらゆる権力集団が、彼らの快樂のために社会の残りの人々を収奪し、搾取してはならないという根拠は全く存在していないのである。(Knight [1929] 1982, 19)

5. 愛の多義性——「競争心・キリスト教の倫理および『利潤』再考——

実際、「自由とは力を発揮する自由」に他ならないから、「力の使い道に対する」制約は政治的な“ねじれ”，より正確には本来の権力の抑制と均衡や、それを介した——党利党略を越えた——知的な審議ぐらいしかなく、したがって究極的な「唯一の制約は、本来的に倫理的な制約」以外にはないと言える (Knight [1929] 1982, 19)。あるいは、ナイトが既に「競争の倫理」で結論していたように (Knight [1923] 1999, 89 / 訳 47)、「人間関係の理念型のための基礎や、活動の動機として是認するための現実的な倫理的根拠を競争に求めても無駄」だ、と明言してもよいだろう。

もっとも、「人間関係の理念型のための基礎」としての競争の欠陥については既に十分確認済であるから、以下早速「動機」としての「競争心」に焦点を絞ろう。ナイトは尋ねる。

エミュレーション
競争心は、動機として、倫理的にみて善いものだろうか、悪いものだろうか。どのような競争コンテストであれ、そこで成功を収めることは、それ自体として高貴な目的なのだろうか。人々が一致して獲得しようと躍起になってきたものであるという事実よりほかに、高い値打ちをもつ、真に価値あるものなど存在しないのだろうか。(Knight [1923] 1999, 82 / 訳 36-37)

ナイトはさらに、ビジネス・ゲームで培われる資質には賞賛に値する美質が備わっているか、とも自問し、「そのようなものを認めない反対

意見の方が支配的であることは、事実として否定しがたい」(ibid., 81 / 訳 35)と自答している。そして確かに、「競争的なビジネスが最大限に発達し、それに付随して、生活をスポーツのように捉える見方が最高潮にまで達したアメリカ」のように、「勝利すること」が優先され、「敗北したら潔く退いて、姿を消すこと」が求められる社会が善い社会だとは、決して言えないだろうと述べている (ibid., 82-83 / 訳 37)。

くわえて、今日の欲望の対象の多くは、「それ自体には何ら価値のない」「カードや駒」、「徽章やメダル」のような「成功の証」にすぎず、したがって「倫理の見地からみれば、文字通りの『悪』循環」にすぎないと言える側面が強い (ibid., 66, 73 / 訳 9, 21-22)。(経済学が暗黙に前提しているように)人々が欲望しているという事実をそのまま価値の裏づけであると自明視することもできない。その上、西洋社会の道徳的基盤とされるキリスト教では、「徳は良心のうちに、すなわち客観的な善の正確な理解よりも、正しいと信じることを行うことにある」ため (ibid., 88 / 訳 46)、周囲の動向や“空気”を読み合い、競い争う「行為それ自体」もまた、「競争心」同様、罪悪視されかねないという問題を孕んでいる。

要するに、「キリスト教の善の概念は競争と対立するもの」なのだが (ibid., 88 / 訳 45)、この点を明示するため、ナイトは次のような興味深い事実に注意を喚起している。

我々は必ずしも福音書の中心人物が苦行者であったと信じるように強制されている訳ではない。彼は決して快樂それ自体を咎めはしなかったし、彼自身の人生を喜び楽しんでいたようにも見える。だが、どのような種類の物であれ、彼が競争的スポーツに参加している様子は想像できない。最も特徴的な彼の言説は、後にいる者が先にならなければならず、上にたつ者は万人の奉仕者にならなければなら

らない、という熱心な勧告であった。(ibid., 88 / 訳 45-46)

このように、本来先頭に立てる者が後列に回り、人々を支えるべきと説くキリスト教と、他人より一歩でも前に出るよう日々精進すべきと説く競争の倫理は、本来的に相容れない部分をもっている。競争の重視へと徐々に軸足を移してきた近代自由社会とその正当化の一翼を担ってきた経済学は、「西洋人が誉めそやし続けてきた宗教上の理想とは大きく異なっている」のである(ibid., 66 / 訳 10)。しいて共通点を探せば、ナイトが「かつてシカゴ大神学部での講義」で述べたように、「経済人と完全なキリスト教徒」は「どちらも友人を一人としてもっていないだろう」という点ぐらいではあるまいか(Stigler [1988] 1990, 17 / 訳 21)。

いずれにせよ、ここでより重要なのは、勿論、「我々の思想や文化の根本に関わる二元論を生み出す」(Knight [1923] 1999, 66 / 訳 10)この倫理的裂け目を修繕しうる決定的な方策が、未だどこにも見つかっていない、という現実である。ナイト自身「見つけれなかった」と告白している。

我々の宗教的倫理のなかに遊び心の占める場所は無い。特に、競争的スポーツの勝負心が占める場所はない。他方で、ゲームにチャリティーの占める場所はない。慈悲の心が入り込んだ時点でゲームは終わる。人々は勝つためにプレーしなければならないのであり、その意味で利己心に従わなければならないからである。ここには、多かれ少なかれ、社会の組織化の問題と倫理的な問題の境界線上に位置する多くの問題があり、私にはそのうちの多くに答えを出すことなどできないように思われる。(Knight 1960, 109)

とはいえ少なくとも、キリスト教の「愛の福音」

が競争体制の^{プリンシプル}原動力にはなりえない、という点については十分確認できたと、ここに明記してもよいだろう。

だがそもそも、愛の福音とはキリスト教の専売特許なのか。愛とは果たしてキリスト教の博愛だけなのだろうか。そんなことはあるまい。むしろ現代では違った形の様々な愛が、半ば都合よく満ち溢れているとすら言ってよい。まず何より「誰であれ、隣人を自分自身のように愛する方が、隣人の子供を我が子のように愛したり扱ったりするよりもずっと易しい」(Knight [1941] 1982, 205 / 訳 155)という本源的偏愛や没我的溺愛がある。違いが分かる狂信的な執着^{マニアック}や学術的^{アカデミック}な専心、職人的^{クラフツマンシップ}の矜持やスポーツマンシップ、さらにはオタク的嗜好さえ、今や日常語の愛に包摂されているかのようにも映る。もとより、平等を求める「常識的見解とは裏腹に」、「階層や地位の序列」、「競争相手を上回る高さやその輝きの程度」といった「不平等の程度それ自体」への執心も抜きがたい(Knight 1936, 262-63 / 訳 67)。こうした世の情景が^{少なくとも}も3つの原色で構成され、アクセルとブレーキの双方が車に必要である様に、今確認した愛の多義性や^{プリンシプル}素因の多元性もまた、近代^{フリー・エンタープライズ}自由企業社会の発展を彩る重要な基礎原理の1つとして、今日より明確に意識されるべきではなかろうか。ナイトも指摘している。

近代社会では、人間関係は互恵的な尊敬や友情という理念、とくに能力、先見の明、信頼性という「市民的美德」に基づいているが、それは新約聖書の教えのなかでは(控えめに言っても)目だったものではない。それなりに納得できる意味としての「愛」は、いまでは状況に応じて無限に変化する実際のかつ適切な内容をもつ高度に選択的な態度である、と理解されている。つまり現代の用語法では、道徳的な美德としての愛がもつ意味内容は、「価値」、すなわち真、善(公正さや寛容さ)、

美への愛であり、とりわけ——しばしば見逃されてきたから指摘するが——能力やその相補物、高級なモノ作りに対する愛なのである。もし人間の一生がより良いものになりうるとすれば、それはきつとこのような理念や態度を育成することによって成し遂げられるのであり、分け隔てのない熱情で世界中の他者を愛するように万民に教え込もうという試みによってではないだろう。(Knight [1941] 1982, 205-06 / 訳 155-56)

勿論、どのような愛であれ、我々は愛（倫理）だけでは生きられない。無論、パン（経済）だけ、ましてサーカス（競争）や理（知性）だけでも生きてはゆけない。我々が人間的生活を自立のかつ自発的に送るためには、すなわち宗教指導者や主君の命からも、地主や資本家の指図からも、大企業や政府の誘導からも、組織や制度のしがらみからも真に解放された自由な存在として自律的に生きていくためには、愛（生の礎）も、パン（生の糧）も、サーカス（生の歓危）も、理（生の飛翔 [と墮落]）も、そしてこれら全てに関わる潤滑油かつ燃料としてのお金（生の手段）も、いずれも不可欠 [ないし不可避] なのである。

そしてだからこそナイトは、今改めて振り返ってみれば、最初にして最後の体系的専門書である『利潤』の終幕を、以下のように歯切れの悪い、とはいえその後の批判活動に秘めた建設的真意を暗示する結語によって閉じざるをえなかったのだと思われるのである。

専制的、人為的、道徳的、もしくは合理的な社会の再建は、それがどのようなものであれ、社会の継続性という問題に関わる究極の困難を抱えている。人は裸で、何も持たず、無力で、無知で、何の訓練も受けていない状態のまま生まれてくるのだ。したがって人は、自由契約を結ぶ存在として必要不可欠なものを

習得するために、人生の3分の1を費やさなければならぬ。どのようなものを我々が理想的であると考えようと、^{コントロール}規制手段や個人の能力、職業や地位向上の機会、労働や不確実性といった重荷、社会的な勤労がもたらす物質的な成果の配置を急激に変更することなど、容易にできるはずがないのである。…生命の灯それ自体は勿論、我々を社会生活に適合させている世界の物質的富や、途方もなくくりますます複雑になっていく技術システム、そして慣習もまた、去り行く過去の人間が持っていたこれら全てに欠ける新たに誕生する個人へ、何らかの方法で伝えられなければならない。私的な家族制度や、（財産同様、自分自身の所有も含めた）私有財産制度、相続や遺産・親としての義務に関する社会制度に伴われている現行の秩序は、この問題に取り組む際に、多かれ少なかれ許容できる結果を確保する、1つの方法を提供している。その結果は理想的なものでも、満足のものでもない。しかし、特に我々自身、何を望んでいるかということも分からず、意見も一致していないということを考えると、社会を再編しようという提案に対処する時に慎重さや謙虚さを思い起こさせてくれるのは、急激な変革に伴う困難を包み隠さず考慮することなのである。(Knight [1921] 2006, 374-75)

III シカゴ学派の“起源”再考——学派の祖としてのナイト像誕生の背景——

以上のように根源的かつ先見的な慧眼と、多面的かつ重層的な分析をへた結果としての保守的姿勢こそナイトの真面目である。そしてそれはまた、シカゴの同僚や高弟だけが直に真正面から向き合い、彼ら独自の視点や鋭利な手法、周到かつ大胆な政策提言の論拠等々を鍛え上げるべく論戦を挑みえた知的本拠地^{ホーム・グラウンド}であると同時に、教え子たちが最終的には背を向け、より建設的^{ポジティブ}で前向きな道を開拓すべく巣立って

いった方法的^{バックグラウンド}背景でもある。そうした飛躍を経てなお彼らの脳裏に深く焼き付いて離れなかったのは、「専門家の間だけで通用している上辺だけの言葉の意味を掘り下げ、知識人の先入観や偏見」、「洗練された科学的なものとして受け取られている議論のなかにある詭弁や無意味な言葉、ばかげた言動をさらけ出す」ナイトの批判精神だったと断言してよいだろう (Buchanan 1982, xiii, xi).

だとすれば、ナイトの高弟たちが恩師の教えをそのまま継承することなく、次元や方向の異なる手法やより具体的な政策提言に乗り出して行ったとしても、何ら驚くに値しない。優れて方法論的かつ実践的^{ポジティブ}な『実証経済学』(1953)や「恒常所得仮説」(1957)などの展開を皮切りに、通貨・金融政策論や大恐慌研究等をめぐる新たな地平を切り拓いただけでなく、 $x\%$ ルールや変動相場制、負の所得税や教育バウチャー等々、極めて挑戦的で具現的かつ予言的な政策提案まで数多く実践し続けたフリードマンは、その最も対照的な例だろう (Friedman 1953; [1980] 1990)。また、ナイトの下で博士論文『生産と分配の理論』(1941)を完成させ、当初は学説史家として出発しながら、R. コースとの知的交流などを経て「情報の経済学」(1961)やシカゴ派『産業組織論』(1968)を創始するにいたったスティグラーも、同様だと言ってよい (Stigler [1941] 1994; [1968] 1983)。

くわえて、1930年代前半に提出された金融制度改革案や財政出動を求めた政策提言など (Davis 1968; Phillips 1995)、喫緊の経済問題に対しては共通の論陣を張っていたナイトの同僚たちも、学内では様々な論戦を繰り広げていた。要するに「当時、思想上の支配的な学派などはなかった」のである (Stigler [1988] 2003, 22 / 訳 27)。なかでもナイトと、価格理論の注意深い援用法の「起源」とされる理論講座を担当していたJ. ヴァイナーとの間では、費用概念をめぐる論争が「執拗に繰り返」されていた (ibid.,

22; 156 / 訳 27; 183-84)。さらに、「良き社会について、明快な設計図をもっていたという点で、学生たちに、おそらくはもっとも影響を及ぼした人物」であり、「公衆や多くの経済学者たちがシカゴ学派の中心的主張と考えるものの先駆者」でもあった「弟子」のH. サイモンズとも、ナイトは「意見が合わなかった」(ibid., 20; 22; 139 / 訳 26; 28; 163)。事実たとえば、サイモンズは「鉄道や電話のような基幹産業」の「国有化」を唱え、「所得課税については極端ともいえる平等政策」を提唱していたのである (ibid., 148-49 / 訳 174-75; Simons 1948; 大野 1965)。

もとより、シカゴ大にはO. ランゲが1938年から1945年にかけて在籍し、教鞭を振るっていた。当時学生だったD. パティンキン^{Patinkin}は、ランゲとナイトの好対照な授業風景を次のように回想している。「私のシカゴ大学での学生時代には、まったく皮肉なことだが、社会主義者のオスカー・ランゲが、完全競争市場で実現するパレート最適を賞賛し、フランク・ナイトは、パレート最適の奥にある福祉の含意は、きわめて限定されていることを我々に教えてくれた」(Patinkin [1973] 1981, 801 / 訳 192)。「ナイトが、分析の基本的定義と仮定(“完全競争”, “完全予見”, “欲求”, “費用”, “資本”, “平等”, その他)の意味を(とりとめなく、しばしば曖昧に)詮索することに多くの配慮を払ったのに対して、ランゲは(対照的に、明瞭かつ体系的に)こうした仮定のもつ論理的な帰結の導出に主として関心をもっていただけ」のである。「このように、ナイトとランゲは驚くほどお互いに補完しあっており、そのためにそれぞれの講義過程での生産性は向上した。二人の教師の間にもみられた暗黙裡の対話を通じて直接の利益をうけたのは我々学生だった」(ibid., 789 / 訳 214-15)。

ナイトがまだ理論経済学者として活躍していた時代のシカゴ大は、このように社会主義者から保守主義者までもが平和裡に共存し、議論を活発に戦わしうる自由な学園^{アカデミア}であった。それば

かりか、その後シカゴ大が教授職就任を打診し、獲得に動いた経済学者の中には、P. サミュエルソンやJ. トービンら論敵も含まれていたという裏話もあれば (Stigler [1988] 2003, 168 / 訳 197), 1933 年末の時点で既に、(コブ=ダグラス関数で有名な後の民主党上院議員) P. ダグラスとナイトとが深刻な“冷戦状態”に陥っていたという秘話も漏れ伝わっている (ibid., 180-90 / 訳 210-21). さらに、1960 年にシカゴで誕生した「コースの定理」が、その定式化と普及に尽力したスティグラーによって展開されたように、公的規制の「限界」を強調すべく利用されうるのは勿論 (ibid., 73-90 / 訳 86-106; Kitch 1983), そうした定式化と普及に強く抵抗し続けたコース本人が繰り返し強調したように、それは元々、法制度の「意義」を明示すべく考案された単なる思考実験にすぎない、という理論的史実も看過できない (Cooter 1982, 1 / 訳 51; Coase [1988] 1990; 黒木 2002a). くわえて、ナイト自身がかつて「私はヴェブレンの信奉者である」と明言し (Knight 1952, 52), 「あらゆる経済学の原理を福音として講釈する正統派経済学者と話す時、私は口やかましい制度派経済学者になるでしょうし、その原理は全く無意味だと主張する制度派経済学者と話す時、私はヴェブレンの信奉者や他の制度主義者がひどく軽蔑の対象とする『正統派の学説』、その体系を擁護するでしょう」と主張していた学史的事実もある (Knight 1960, 82).

そして以上の史実は、いわゆる新古典派の言説を中核とした経済理論がたとえ論理的に正しく、方法的一貫性が確保されているとしても、そこから直接的に導かれる制度論までもが正解とは限らず、実は正反対の“経済体制”を支持する論拠にもなりうる、という現実を浮き彫りにする (荒川 1999). 経済理論それ自体では、資本主義“対”社会主義といった論争に決着をつける試金石にも、いずれかの“経済体制”を擁護する根拠にもなりえないのである。そもそ

も効率性や費用-価格計算といった技術的な問題は、どのような社会体制であれ常に付き纏う普遍的課題であるし (Knight 1936), 「完全競争市場」や「コースの定理」, 「パレト最適」や「ナッシュ均衡」といった普遍的概念それ自体は、あくまで、政治的・道徳的・審美的論点が複雑に絡み合う現実の“経済問題”を裁断するための一つの切り口にすぎないからである。したがって総合的に判断した場合には、まさにその“科学的”視点に依拠した政策論が全く公正中立でないどころか、事態を更に悪化させる失策や失政となる危険性も十分ありうる、ということになる。

実際、一見どんなに首尾一貫した政策論であっても、立論の前段に潜んでいる哲学的基礎や方法的支柱、背景に控えている論者の審美的・道徳的・政治的私見等々、より低次・高次の視座が複数追加された途端、無数の欠陥が露見する可能性は十分ありうる¹¹⁾。それどころかまさにこの点こそ、近現代の人々が世界中で嫌というほど繰り返してきた悲劇の根本的背景に他ならないと言っても決して過言ではないだろう。さらにまたこの点は、最晩年に至ってもなお教養子たちへ「絶対主義的解釈」の誤謬に陥らないよう注意を喚起し続けることになったナイトが、かつてアメリカ経済学会会長演説の場で、「私の仕事は立派な仕事なのか、そうではなく、いかがわしい飯の種ではないのかとの疑念に、ますます心揺さぶられるようになってきた」と吐露した認識論的背景であると同時に (Knight [1951] 1999, 362), 「正しい原則は、あらゆる諸原理を尊重し、それらを十分考慮したうえで、検討中の事例について、ある原理にどこまで従い、他の原理にどこまで従うのかをめぐって良識 good judgment を働かせるというものである」で、「真に正しい方針は最善の妥協をはかること、すなわち善と悪からなる最良の、と言うより『最悪さが最少の』組み合わせをはかることだ」と明言した哲学的根拠でもあると言ってよ

い (ibid., 366).

くわえて、均衡概念に依拠した経済分析では、「時間が止まっている」という点、すなわち人々の価値観などが不変であると前提されているという事実も、ここで改めて指摘しておかなければなるまい。なぜならこの時間次元の捨象——歴史的時間の停止——は、絵や写真のように一目瞭然という訳にはいかないばかりか、不変ないし究極の素材・データを扱う物理学とデータの中身や意味内容が時間と共に変質する経済科学との間に決定的な違いをもたらす原因として、ナイトは勿論 (Knight 1999)、A. マーシャル以降の優れた理論家が繰り返し指摘してきたにも関わらず、容易に見過ごされてしまいがちだからである。

さらに厄介なのは、この認識論的問題が理論家の意図や業績それ自体とは一先ず切り離して論じなければならない普遍的難題だ、という点である。というよりむしろ通常は、理論家の真摯な意図や慎重な作業に反して結果的に、あるいは当の思想家の手や頭を離れ——例えば筆者のような——赤の他人や直弟子によって、世に「だまし絵」のような玉石混交の虚構が広められていく可能性の方が高い、と断言してよいだろう。つまり、ある時点における特定の位置と角度からみた美形や良景、正面や善面の描出によって不可避免的に生じてしまう他次元の昇華や浄化、低下や世俗化が半ば無意識に同時進行し、受け手の側の立ち位置や死角、補整や解釈がさらに拍車をかけてしまっている可能性の方が高いはずなのである。

しかもどうやらノーベル経済学賞、すなわち A. ノーベル記念スウェーデン銀行経済学賞を受賞するような理論家でさえ、またそうであるがゆえに、こうした錯視・錯覚の問題と言説の普及に伴う災厄から逃れることは難しいようである。そして何より、まさにこの見えざる難所こそ、シカゴ大学という一研究機関内部で対極とも言うべき「経済体制」の支持者を共榮させ、

同床異夢を演じ続けることを可能にしたばかりか、世界各地で様々な論争を巻き起こすほど強烈な不協和音をあつく共鳴させえた最も奥深い源泉であり、それゆえにまた彼らが外部からの激しい口撃や辛辣な批評に晒され、その渦中で「シカゴ学派の良心」とも言うべきナイトが「シカゴ学派の祖」として内部から押し立てられていくことにもなる、という何とも懊悩な極めて人間的因果の、最も幽遠な背景であるように思われるのである。

IV むすび——「偶像の破壊と創造」から 浮かび上がる二つの光景——

以上、「シカゴ学派の生みの親の一人ではあるが、育ての親ではない」とも言うべきナイトの経済学・競争体制批判を凝縮的に再現し、彼固有の自由主義思想の体系性を浮き彫りにすると同時に、経済学が帝国主義的科学へと転化する根本的背景やその方法に潜む普遍的限界、さらにシカゴ学派という概念自体が妖しい危険区域である現実も指摘してきた。

その上で最後に改めて、何かシカゴ学派共通の根っこ、ないし種だけでもさらに掘り出せないものだろうか。つまり危険を承知の上で、敢えて「シカゴ大に在籍したことのある優れた理論家の一群」といった共通項以上の特徴を何か探り当てることはできないものか、という欲深い自問であるが、その答えはどうか、彼らの強い「方法論的批判志向」や「偶像破壊性向」、そしてそれと背中合わせの「結果的な偶像創出傾向」に求める他にないようである。すなわち彼らが、「正統派」の経済分析において暗黙のうち仮定されていた重要な前提を白日の下に晒し、理論の分析道具としての精度や限界を厳密に問い直したうえで、明確な検証・批判の対象となりうる新たな仮説の明示に尽力した、という研究志向の強さのことである。

さらに興味深いのは、今露出した「偶像の破壊と創造」という陰画を下敷に新たなシカゴ学

派の現像まで試みると、少し奇妙な“集合写真”が浮かび上がってきてしまう、という学史的事実ないし仮想現実である。というのもその印画には、「完全知識」の別袂と「完全競争」概念の彫塑によって経済学の精緻化に寄与したナイトが、フリードマンやサイモンズらに囲まれ、無理やり中央に鎮座させられてしまったかのように罰が悪そうに身を振^{よじ}っている姿だけでなく、画面左端には、“新古典派”^{ネオ・クラシカル}という自前の造語をぶつけてマーシャル経済学を批判したヴェブレンが、不敵な笑みを浮かべて丸太の椅子に踏ん反り返り、隣の W. C. ミッチェルや J. M. クラークらと談笑している様子までバッチリと写っているばかりか、画面右端へと目を転じてみれば、「合理的期待形成」仮説を提示し、「マクロ経済学のミクロ的基礎づけ」に着手した R. ルーカス Jr. が、颯爽と胸を張っている姿まで、隣に居並ぶ G. ベッカーやスティグラ、^{ネオ・クラシカル}“新制度学派”のコースや“ヴァージニア学派”の J. ブキャナンらと共に、シッカリと収められているからである。

すなわち 1970 年代、当時主流のケインジアンが政策提言のために用いていたマクロ計量モデルには、当の政策変更とそれに伴う人々の合理的な軌道修正によって変化するはずの構造パラメーターが暗黙のうちに変のそれとして前提されていたため、そうしたモデル分析に依拠して政策提言を行うこと自体が既に方法として間違っている、との「ルーカス批判」を展開した^{ニュー・クラシカル}“新しい古典派”の祖が (Lucas 1976, 1987; 清水 1997), 最右翼に端然と居直っているのはもちろん、他方で——大戦間期に活躍したナイトを軸とした——その対極には、19 世紀末、「限界効用」仮説という奇麗な衣装に袖を通しうる“経済人”が実はビジネスやモノづくりからは不効用しか得られず、^{レジャー}閑暇や消費からしか効用を得られない、といった奇妙な「マネキン人形」に他ならないことを喝破し、ミクロ経済学の功利的基礎に潜む限界を暴露しただけでなく、わ

れわれ人間の不自然かつ不合理な競争「制度」——すなわち家事・肉体労働を軽視し、“セレブ”の顕示的閑暇や浪費を称揚する「思考習慣」——の発現・展開過程までも進化論的に基礎づけうる、新たな行動仮説として、『有閑階級の理論』(1899)を提示した“制度学派”の祖までもが (Veblen 1899; 高 1991, 2004), 悠然と居座っているように見えるのである。

そしてもし、今仮想してきた一枚の画像や一連の映像が、各自の脳裏で何の破綻もなく再生され、完結した一つの学史的^{フィクション}仮構としてスムーズに再現されうるとするならば、本稿全体を通じて総体的に浮かび上がってくるのは、やはり、何々主義や学派といった影象に執着する必要自体あまりなく、ある位置と角度からみた一種の“だまし画”として少し距離をとって見た方が安全だ、という点ではあるまいか。あるいは類似の思考・用語法をめぐる系譜や分布を一覧的に把握すべく、図上ないし頭上に画した^{ハイ・プレッシャー・システム}“高気圧”として、もしくは無数の要素によって規定される各“流動性”間の動向をわずか二次元で切り取り、平面上に射影した為替レート^{スケール}のチャートのような“写像”と同様に、様々な尺度や角度からの“録画と再生”を定期的に試みるぐらいが無難であって、新境地を開拓するための“発破”として遠巻きに眺めるぐらいでなければ逆に危険だ、と言い換えてもよいだろう。

要するに、個々の偉大な思想家の見地や方法に直接対峙・沈潜し、思索の内在的再構成や批判精神の抽出・再現に取り組んでいく方が、一見瑣末かつ迂遠に見えて、実は想像以上に建設的なのである。“第三の道”や“新自由主義”、ニュー・リベラリズムやネオ・リベラリズム等々をめぐる賛否両論それぞれの見地からバラ撒かれてきた陽画や洋画への反省と、それらに取って代わる新たな政策思想の再構築が世界的に要請されている今、改めて、そのための基盤整備を担いうる数少ない視座の一つである経済

思想史研究, すなわちナイト自らライフ・ワークとして取り組み, 結果的にシカゴ学派を派生させることにもなった経済学史研究の深化や進化, それぞれの真価が, 静かに問い直されているように見える。

黒木 亮: 獨協大学経済学部

注

- 1) シカゴで統計学を講じていたこの講師時代に, ナイトはヴェブレンの著作を論じる内輪の勉強会にも参加している (Rutherford 2010, 28).
- 2) そうした一面的見地からの脱却を図った, あるいは既に免れている先駆的な試みや特徴的な学史研究として纏まった書物だけを挙げれば, Samuels ([1976] 1993) や Nelson (2001), そして Emmett (2009; 2010) がある。
- 3) 新たなナイト像やシカゴ学派理解を啓蒙する最近の邦語文献としては竹森 (2007; 2008) や根井 (2008; 2009) を参照。またそこで指摘されているナイトの『『複眼的』かつ『適度に懐疑的』な』『経済哲学』(根井 2008, 35), あるいは『『ファナティック』ではないが, 『堅牢』で『批判的な経済自由主義』(竹森 2008, 19-20) の内奥にまで分け入った開拓的な邦語論文としては, 青山 (1951) や山本 (1990), 佐藤 (2000) や藤井 (2000) がある。
- 4) サミュエルソンがナイトから受けた影響, なかでもバスターセラーの『経済学』に刻印されている「フロー循環図」や経済システムの機能をめぐる整理の仕方など, 「教師としてのフランク・ナイト」や教科書『経済組織』(Knight [1933] 1967) がもたらした学術的遺産やその残照, シカゴ学派をめぐる伝承等については, Patinkin (1981) や Emmett (2010) を参照。
- 5) より包括的なシカゴ学派研究については, Overtveldt (2007) や Emmett (2010) を参照。
- 6) 本稿では触れないシカゴ大学のビジネス・スクールにおける投資・ファイナンス論の興隆や効率的市場仮説の発展——これもまた 1960 年代以降のことである——については, Fox (2009) の第 6 章が詳しい。もっとも, この本ではハイ

エクがシカゴ学派の誕生に寄与した——訳文では「産み落とされた」(ibid., 92 / 訳 121) ——とされ, ナイトの経済思想は勿論, 『利潤』の後半ないし終盤での分散投資論についても特に触れられていない。

- 7) 完全競争理論をめぐるより厳密な議論や思想的背景については, 荒川 (1999) を参照。
- 8) ナイトの企業者概念や利潤の定義の詳細については原典を, その概説としては黒木 (2001; 2002b) や竹森 (2007; 2008) を参照されたい。
- 9) この「シカゴ・プラン」の詳細やより厳密な解説, 1930 年代の金融改革については, Phillips (1995) や須藤 (2006), 西川 (2011) を参照。なお Phillips (1995, 191-99) には, ナイトが, A. ディレクター, A. ハート, G. コックス, H. サイモンズ, H. シュルツ, L. ミンツ, P. ダグラスと連名で, 農務長官 H. ウォーレス宛てに送付した実際の文章も転記されている。
- 10) なお, この講義録の公刊は, ナイトの死から約 20 年後の 1991 年に, W. サミュエルズによって行われたものである (Samules 1991)。
- 11) この点を一目瞭然ないし直感的に把握するためには, ここで一旦この拙稿など放擲し, M. C. エッシャーの「だまし絵」の傑作「上昇と下降」(1960) や「滝」(1961) の“無限循環”を——すなわち階段や水流を絵の枠内で追いつけている限り首尾一貫して見えるのに, 次元をたった一つだけ上げて実際に立体模型を組み上げた途端, 建築物としての破綻や欠陥が露呈してしまう, あの「夢幻循環」(と立体模型) を——ご覧頂くとよいかもしい。

参考文献

- Becker, G. 1991. Milton Friedman. In *Remembering of the University of Chicago: Teachers, Scientists, and Scholars*, edited by E. Shils. Chicago: Univ. of Chicago Press.
- Bronfenbrenner, M. 1962. Observations on the “Chicago School(s).” *Journal of Political Economy* 70 (1): 72-75.
- Buchanan, James. 1982. Foreword. In Frank H. Knight *Freedom and Reform*. Indianapolis, IN: Liberty

- Press (以下 *Freedom and Reform*): ix-xiv.
- Coase, R. H. [1988] 1990. *The Firm, the Market, and the Law*. Chicago and London: Univ. of Chicago Press. 宮沢健一・後藤晃・藤垣芳文訳『企業・市場・法』東洋経済新報社, 1992.
- Coats, A. W. 1963. The Origins of the “Chicago Schools”? *Journal of Political Economy* 71 (5): 487-93.
- Cooter, R. D. 1982. The Cost of Coase. *Journal of Legal Studies* 11 (1): 1-33. 太田勝造訳「コースの費用」太田勝造編訳『法と経済学の考え方』木鐸社, 1997: 51-98.
- Davis, J. R. 1968. Chicago Economists, Deficit Budgets, and the Early 1930s. *American Economic Review* (以下 *A. E. R.*) 58 (3): 476-82.
- Emmett, Ross B. 2009. *Frank Knight and the Chicago School in American Economics*. London and New York: Routledge.
- , ed. 2010. *The Elgar Companion to the Chicago School of Economics*. Cheltenham, UK and Northampton, MA, USA: Edward Elgar.
- Fox, Justin. 2009. *The Myth of the Rational Market*. New York: HarperCollins Publishers. 遠藤真美訳『合理的市場という神話』東洋経済新報社, 2010.
- Friedman, Milton. 1953. *Essays in Positive Economics*. Chicago: Univ. of Chicago Press. 佐藤隆三・長谷川啓之訳『実証的経済学の方法と展開』富士書房, 1977.
- Friedman, Milton and Rose. [1980] 1990. *Free to Choose*. San Diego and New York: Harcourt. 西山千明訳『選択の自由』日本経済新聞社, 2002.
- . 1998. *Two Lucky People: Memoire*. Chicago: Univ. of Chicago Press.
- Hayek, F. A. von. 1960. *The Constitution of Liberty*. Chicago: Univ. of Chicago Press. 気賀建三・古賀勝次郎訳『自由の条件[I] [II] [III]』春秋社, 2007.
- Howey, Richard S. 1983. Frank Hyneman Knight and the History of Economic Thought. *Research in the History of Economic Thought and Methodology*, Volume 1. JAI Press: 163-86.
- Kitch, Edmund W., ed. 1983. The Fire of Truth: A Remembrance of Law and Economics at Chicago, 1932-1970. *Journal of Law and Economics* 26 (1): 163-234.
- Knight, F. H. [1921] 2006. *Risk, Uncertainty and Profit*. Mineola, New York: Dover Publications. 奥隅栄喜訳『危険・不確実性および利潤』文雅堂銀行研究社, 1959.
- . [1923] 1999. The Ethics of Competition. In *Selected Essays by Frank H. Knight Volume 1: “What is Truth” in Economics?*, edited by Ross B. Emmett. Chicago: Univ. of Chicago Press (以下 *Selected Essays Vol. 1*) : 61-93. 高哲男・黒木亮訳「競争の倫理」『競争の倫理』ミネルヴァ書房, 2009 (以下『競争の倫理』) 所収.
- . [1929] 1982. Freedom as Fact and Criterion. In *Freedom and Reform*: 55-153.
- . [1932] 1991. The Case for Communism: From the Standpoint of an Ex-Liberal. *Research in the History of Economic Thought and Methodology, Archival Supplement 2*, JAI Press: 57-108.
- . [1933] 1967. *The Economic Organization*. New York: Augustus M. Kelley.
- . 1936. The Place of Marginal Economics in a Collectivist System. *A. E. R.* 26 (1), Supplement: 255-66. 「集産主義体制における限界原理経済学の位置」『競争の倫理』所収.
- . [1939] 1982. Ethics and Economic Reform. In *Freedom and Reform*: 55-153.
- . [1941] 1982. Religion and Ethics in Modern Civilization. In *Freedom and Reform*: 194-218. 「現代文明における宗教と倫理」『競争の倫理』所収.
- . [1941] 1999. The Business Cycle, Interest, and Money: A Methodological Approach. In *Selected Essays by Frank H. Knight Volume 2: Laissez-faire: Pro and Con*, edited by Ross B. Emmett. Chicago: Univ. of Chicago Press (以下 *Selected Essays Vol. 2*) : 126-50. 「景気循環・利子および貨幣」『競争の倫理』所収.
- . [1946] 1982. The Sickness of Liberal Society. In *Freedom and Reform*: 370-402. 「自由主義社会の病弊」『競争の倫理』所収.
- . [1951] 1999. The Role of Principles in Economics and Politics. In *Selected Essays Vol. 2*: 361-91.
- . 1952. Institutionalism and Empiricism in Economics. *A. E. R.* 42 (2): 45-55.
- . 1960. *Intelligence and Democratic Action*. Cambridge, MA: Harvard Univ. Press.
- . [1967] 1999. Laissez-Fair: Pro and Con. In *Selected Essays Volume 2*: 435-53. 「自由放任主義」『競争の倫理』所収.
- . 1999. *Selected Essays by Frank H. Knight, Volume 1: “What is Truth” in Economics?*, edited by Ross B.

- Emmett. Chicago: Univ. of Chicago Press.
- Lucas, Robert E., Jr. 1976. Econometric Policy Evaluation: A Critique. In *The Phillips Curve and Labor Markets*, edited by Karl Brunner and Allan H. Meltzer. Carnegie-Rochester Conference Series on Public Policy, 1. Amsterdam: North-Holland: 19-46.
- . 1987. *Models of Business Cycle*. Oxford and Cambridge, MA: Basil Blackwell. 清水啓典訳『マクロ経済学のフロンティア』東洋経済新報社, 1988.
- Miller, H. Laurence, Jr. 1962. On the “Chicago School of Economics.” *Journal of Political Economy* 70 (1): 64-69.
- Nelson, Robert H. 2001. *Economics as Religion: From Samuelson to Chicago and Beyond*. University Park, Penn.: Pennsylvania State Univ. Press.
- Overtveldt, Johan Van. 2007. *The Chicago School*. Chicago: Agate Publishing.
- Patinkin, Don. 1973. Frank Knight as a Teacher. *American Economic Review* 63 (5): 787-810. 季刊現代経済編集室訳「教師としてのフランク・ナイト (I) (II)」『季刊現代経済』15: 212-24, 17: 188-201.
- . 1981. *Essays On and In the Chicago Tradition*. Durham, NC: Duke Univ. Press.
- Phillips, J. R. 1995. *The Chicago Plan & New Deal Banking Reform*. Armonk, New York: M. E. Sharpe.
- Reder, Melvin W. 1982. Chicago Economics: Permanence and Change. *Journal of Economic Literature* 20 (March): 1-38.
- Rutherford, Malcom. 2010. Chicago Economics and Institutionalism. In *The Elgar Companion to the Chicago School of Economics*, edited by Ross B. Emmett. Cheltenham: Edward Elgar: 25-39.
- Samuels, Warren J., ed. [1976] 1993. *The Chicago School of Political Economy*. New Brunswick and London: Transaction Publishers.
- . 1991. Introduction. *Research in the History of Economic Thought and Methodology, Archival Supplement 2*. JAI Press: 49-55.
- Samuelson, Paul. [1973] 1983. Frank Knight, 1885-1972. *Economics from the Heart*. San Diego and New York: Harcourt Brace Jovanovich: 160-62. 都留重人監訳『サムエルソン 心で語る経済学』ダイヤモンド社, 1984: 206-09.
- Simons, H. C. 1948. *Economic Policy for a Free Society*. Chicago: Univ. of Chicago Press.
- Stigler, George J. [1941] 1994. *Production and Distribution Theories*. New Brunswick and London: Transaction Publishers. 松浦保訳『生産と分配の理論』東洋経済新報社, 1967.
- . 1961. Economics of Information. *Journal of Political Economy* 69 (3): 213-25.
- . 1962. Comment. *Journal of Political Economy* 70 (1): 70-71.
- . [1968] 1983. *The Organization of Industry*. Chicago: Univ. of Chicago Press. 神谷傳造・余語将尊訳『産業組織論』東洋経済新報社, 1975.
- . [1988] 2003. *Memoirs of an Unregulated Economist*. Chicago: Univ. of Chicago Press. 上原一男訳『現代経済学の回想』日本経済新聞社, 1990.
- Veblen, Thorstein B. 1899. *The Theory of Leisure Class*. New York: Macmillan. 高哲男訳『有閑階級の理論』筑摩書房, 1998.
- 青山秀夫. 1951. 「競争の倫理」『季刊理論経済学』2 (2): 73-80.
- 荒川章義. 1999. 『思想史のなかの近代経済学』中央公論新社.
- 猪木武徳. 1995. 「シカゴ学派の経済思想」根岸隆編著『経済学のパラダイム』: 175-98.
- 宇沢弘文. 2000. 『ヴェブレン』岩波書店.
- 大野忠男. 1965. 「シカゴ学派の自由主義」『季刊理論経済学』15 (2): 13-22.
- 黒木 亮. 2001. 「フランク・ナイトにおける企業者と競争的経済秩序」『経済学史学会年報』40: 43-55.
- . 2002a. 「ロナルド・コースの産業組織論」『経済論究』112: 89-114.
- . 2002b. 「ヴェブレンとナイトの企業者論」『経済学史学会年報』42: 71-83.
- 佐藤方宣. 2000. 「フランク・ナイトにおける市場経済の倫理的検討」『三田学会雑誌』93 (1): 237-58.
- 清水啓典. 1997. 『マクロ経済学の進歩と金融政策』有斐閣.
- 須藤 功. 2006. 「アメリカ新自由主義の系譜—ニューディール金融政策と初期シカゴ学派」権上康男編著『新自由主義と戦後資本主義』日本経済評論社: 139-78.
- 高 哲男. 1991. 『ヴェブレン研究』ミネルヴァ書房.
- . 2004. 『現代アメリカ経済思想の起源』名古屋大学出版会.
- 竹森俊平. 2007. 『1997年—世界を変えた金融危機』朝日新聞社.

- . 2008. 『資本主義は嫌いですか』 日本経済新聞社.
- 西川純子. 2011. 「ニューディールの金融改革」『経済史研究』 14: 67-99.
- 西山千明. 2008. 「ハイエクとシカゴ学派のこと」F. ハイエク著, 西山千明訳『隷属への道』春秋社: 371-90.
- 根井雅弘. 2008. 『経済学とは何か』 中央公論新社.
- . 2009. 『市場主義のたそがれ』 中央公論新社.
- 藤井賢治. 2000. 「F. ナイトにおける経済学の倫理性と科学性」『経済学史学会年報』 38: 134-45.
- 山本貴之. 1990. 「フランク・ナイトの社会科学」『大阪大学経済学』 39 (3)・(4): 23-41.

Frank Knight's Critique of the Free-Enterprise System and Positive Economics:

A Reconsideration of the Chicago "School"

Ryo Kurogi

One of the most distinguished features of Frank Knight's liberal thought seems to be his economic, political, and ethical criticisms both of the case for and against the free-enterprise competitive system. Through this multi-level, poly-angular analysis and on a resignation that the system appears as the best or "least worst" as possible human beings build on earth, Knight continued to identify many defects in the system, and disclose many absurdities in the way of thinking on which we rest unwittingly. For "men's errors," he believed, "mostly lie in their premises, not in bad logic."

In this paper, I select the following five topics through which Knight repeatedly discussed our premises: (1) uneconomic aspect of competition, (2) normative and conservative character of positive economics, (3) imaginary nature of

the idea of natural rights, (4) self-deconstructive tendency of business and the power game, and (5) plural meanings of love in liberal society.

This paper proposes that Knight's radical yet constructive criticisms aimed to refine, rather than advocate, the free-enterprise competitive system and warn against the fallacy of "absolutism: holding that a statement must be either true or false and that, if false, antithesis must be true." So this essay not only destructs the image of Knight as a neo-classical economist, but also clarifies the differences and similarities between him and later Chicagoans. That is, it illuminates the contrary directions of their perspectives and the identical iconoclastic propensity for disclosing implicit postulates.

JEL classification numbers: B 19, B 31, B 41.